

～「買い物依存症と借金」～

- 仮名：Fさん
- 年齢：31歳
- 性別：女性

【買い物依存症】

Fさんは31歳。専門学校を卒業して以来、派遣の医療事務員として働いていた。仕事は順調だったが、30歳を目前にして、4年間交際し結婚を考えていた男性と別れたことが影響し、傷心から借金地獄へと向かってしまった。Fさんは、傷ついた心を癒すため人生初の海外旅行へ出かけ、現地でクレジットカードを使いブランド物を買った。その海外旅行をきっかけに借金を繰り返す。どうしようもない状態に陥っていた。少しでも現実から目を背けたかったという。Fさんは帰国後もブランド物を買った。健康食品にエステ、ショッピングもエスカレートしていく。いけないと思いつつ、買うことを我慢できない。「サインすれば何だって私のモノ」…気づけばカードのショッピング枠とキャッシング枠を使い切っていた。

【借金から借金へ】

一か月後、請求書の山を前にしてFさんは顔面蒼白になった。しかし、財布の中の現金が減ったわけではない。「今回の支払いさえ乗り切れば…」そうして給料日から給料日までの綱渡り的な「自転車操業」が始まったのである。カード会社以外にも、まだ金を貸してくれるところはある。今度は消費者金融だ。「A社がダメでもB社がある」。毎月の返済のため、消費者金融のATMでキャッシングを繰り返す日々が続いた。消費者金融が通帳代わりだ。毎月の返済は約15万円。返済だけで給料が消えてしまう。家賃も滞り、延滞を繰り返していた。度重なる職場への督促電話に嫌気がさして、既に仕事も退職した後だった。

【借金と幻想】

「ソーブランドで働こうと思うんです。買ったバッグ、手放したくないんで…」とFさんは言った。ブランド物を纏うことで手に入れた優越感を手放せない。「カラダさえ売ればお金は返せる」「ブランド物を買えるかもしれない」それくらいの安易な発想で「ソーブランドで働く」と言っているのだろう。ブランド物を身に付ければ、周囲は「カッコいい」と言ってくれる。ブランド物さえ身に付けば、みんなが私の事を見てくれる。いつしかFさん自身がブランドに支配されるようになってしまった。「ブランド物でステータス化された自分」を守り続けるため、カネでは買えない「命を生み出すカラダ」まで売りに出そうとしていた。

【幻想から現実へ】

この様な場合、まずは現実に引き戻して、安易な考えを捨てさせなくてはならない。そのため最も有効なのが、徹底的にこき下ろすということだ。現実へ引き戻すためにも、ソーブランドで働かせないためにも、私はFさんを徹底的にこき下ろす。これが説得のための作戦だ。私が異性としての意見をはっきり言ってあげることである。「まずは、歯を治すこっちゃ」「アンタが出てきたら、俺ならガッカリしちゃうなあ」Fさんを夢と幻想の世界から覚醒させ、現実の世界へと引っ張り戻す。

その後、Fさんのケースは特定調停で話が付いた。特定調停とは、出資法を基準とした金利を、利息制限法に基づいた金利で引き直すことだ。もちろん、借金がゼロになるわけではない。しかし、現実的に返済可能な金額に圧縮されるのだから、未来が明るくなる。結果として、月々3万円の返済を続けることで和解となった。

それから数日後、彼女は薄化粧で訪れ、さっぱりとした笑顔で言った。「19万円のバッグ、売ったら6万円だったよ」。ブランド物のためにカラダをボロボロにしてどうすんのや。「ホントに大事なものは、カネじゃ買えんのやから」そう伝えた。



毎週水曜日の午後は、ボランティア隊が歌舞伎町のごみ拾いをしていただいています。空き缶、たばこの吸殻など、毎週ものすごい量がトングで集められます。ゴミ溜めのような環境を浄化し、人の心もきれいに！との意気が伝わってきます。